

---

# 異完二の場合

まさやか

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異完二の場合

### 【Nコード】

N2552Z

### 【作者名】

まさやか

### 【あらすじ】

異完二にモテ期がやって来た！？ 次々と女性たちに声をかけられる完二。それは新たなシャドウの攻撃か、はたまたモテ期の襲来か……？

## 前篇 モテ期がやってきた!?

うつす。俺は巽完二つす。名前は、別に覚えてくれなくても結構気に入らないヤツまで友達になるつもりないつすから。

まあ念のために自己紹介的なことを言っておくと、俺はある高校の1年だとある組織に所属している。つつても不良の集まりじゃねえぜ。その逆。正義の味方だ。自称特別捜査隊つつて、警察が取り締まれない悪をやつつけるための組織だ。

どんな悪かつて? そいつは一言じゃ答えられねえ。とにかく俺達の町をどーにかしまうほどのドでかい悪だ。特別な力を持つ俺やその仲間じゃねえと歯が立たねえ相手に、正直、倒せるかどうかは五分五分だった。

なんとか番長格の〳〳先輩のお陰で、やつつけることが出来た。今、クリスマスを前にして町が平和なのもそのせいさ。ウソじゃあねえ。

あ、〳〳先輩つつーのは自称特別捜査隊のリーダーで、俺が尊敬する先輩のことだ。

まあ、それらの事件のことは置いておいて……。

さて、今日ここで話をするのは、なんつーか、俺の身に奇妙なことが起こったからで、つつても今までの自称特別捜査隊で扱っていたようなバケモンや殺人とかじゃない、小さな出来事なんだが……これが何とも不思議だよ。

ま、俺のお袋は昔から、「お前は心根が優しくて繊細だから、女の子にはもてるだろうよ」と言っていたんだが、俺はまともに聞いちゃいなかった。

いくら何でも俺のこのナリでもてるとは思えねえ。この格好は俺のポリシーであり、俺は好きだが、万人受けしないのも分かっているから、お袋の親バカ発言は適当に流していた。

ところが、だ。そんな俺が師走のクリスマスを前にもてはじめたのだ……。

事の発端は、昼休みのことだった。

俺がお袋の弁当を食った後、編みぐるみの凶案をぼんやりかんがえていた。頑張つてクリスマス用のサンタを作るか、それとも来年の干支にするか。

頭の中であれこれ考えていると、男2人が連れだつてこちらに来るのが目に入った。

1人は、一条先輩というバスケット部の部長。もう1人は長瀬先輩というサッカー部の部員だ。2人は仲が良いが、俺はそうじゃない。なのに2人はベンチの前にびたりと立って、俺を見降ろした。

「あの、巽完二くん……だよな？」

気の弱そうな一条先輩が、俺にこわごわと話しかけてきた。

「あん？」

俺は警戒の目で2人を見上げる。2人はたちまち顔をこわばらせた。

「そのメンチ切つてるような目が怖いのよ。何とかならないの？」と、里中先輩からよく言われる。が、俺はそんな気はなく、ナチュラルに見ているだけだから、怖がるのは相手の問題だ。要はビビりつてことだろ。

「き、キミさ、里中と親しそうだけど……」

「だからなんスか？」

「どういった関係なの？」

一条先輩は、言いくそくに尋ねてくる。

「どういうつつても……」

俺は口ごもる。

里中先輩は、自称特別捜査隊のメンバーの一人で共に闘っていた仲間だ。自称特別捜査隊のことや敵のことは一般人には秘密っつーか理解してもらえないだろうから、説明しても無駄だろう。

俺が黙っていると、一条先輩はさらに続けた。

「里中くんが誰かと電話しているのを聞いちゃったんだよね。『完二に聞いてみる。このままだと私、何が一番か分からないの』」

なんだそりゃ？ 俺は驚いて目を向いた。が、細目の俺が目をむくと怖いらしい。一条先輩はビクツと身体を震わせた。

「『ダメならダメでいい。完二に思い切って、自分をさらけ出してみたいの』って。これって、ひょっとして、キミが里中を脅迫しているの？」

「ち、ちげーよ！」

俺は思わず立ち上がる。相手はビビっているが、それでも怯まない。怖いにもかかわらず、俺に話しに来たってところか。俺にとっでは迷惑だが、ガッツがある男のようだ。

「だとしたら、里中はキミのこと……」

一条先輩はガクツとうなだれた。

「どーしたんだよ、おい！」

お先真っ暗、といった暗い表情で落ち込んでいて、その肩を長瀬先輩が支えてやっている。

「ごめんよ、巽くん。一条の奴、里中が君のことを話しているのを聞いて、あれこれ思い悩んでいて……」

「なんで一条先輩が、俺や里中先輩を気にするんスか？」

「それは……察してくれよ。疑って悪かった。悪気はないんだ。済まなかつたな」

長瀬先輩は言い訳っぽいことを言うと、うなだれている一条先輩を引つ立てて去って行った。

一条先輩が里中先輩に好意を抱いているとは聞いたことがある。が、それは俺とは関係ない話……のはずだ。

訳も分からない内に嫌みを言われたり、誤解されたりは、俺の人生でよくあることだったが、こういうのは初めてだった。

里中先輩、なんであんなこと言ったんスか？ と、直接聞いてみないといけねえな、と思った。

まさか、この件が大事になるとは思ってみなかつたんだ。

放課後、俺はジュネスの屋上のフードコートに向かった。ここは、自称特別捜査隊がよく集まる場所だ。ここで待っていれば里中先輩に会えるだろう。

ところが、そこには久慈川りせが座っているだけだった。暇つぶしに雑誌をぱらぱらめくっている。

「あれ、先輩達は？」

「花村先輩はバイト。他は知らない」

りせは雑誌から顔を上げずに言った。

「里中先輩、今日は来るんかな」

「うーん、知らない。来ないんじゃない？」

りせは少し刺のある言い方をした。

「何だよその言い方。何かあつたのかよ」

俺はさっきのこともあつて、気にかかった。

「別に……ちよつとした意見の相違があつて、そんだけ」

その態度、ぜんぜん”そんだけ”って感じじゃねーよ。

りせは雑誌から顔を上げると、気だるそうに伸びをした。

「あーあ、先輩つてさ、どんなにいい人でも、こつちは気を使つよ  
ねー」

自称特別捜査隊のメンバーは、2年生が4人。リーダーの〱〱先輩、花村先輩、里中先輩と天城先輩。1年生が3人。おれ、りせ、直斗。そしてクマ。全部で7人と1匹だ。となると、先輩が4人いることになる。

「お前が気を使つつーのも想像できねーな」

「これでも芸能界でやってきたんだよー。上下関係厳しいんだから基本、逆らつちやいけないから、意見も遠慮しいしい言わなきゃならないし。とはいっても、バシツと言わなきゃいけないことは私は言つちやうけどね」

りせは言う。同じ商店街で育つた幼馴染なせい、俺には遠慮が

ない。

「でさ、完二。なんで里中先輩のこと気にしてんの？」

「え？ あ、いや……」

「んーまあ、里中先輩に何か言われたんでしょ」

「なんで分かるんだ？」

「大体ね。実は、意見の相違つてのも、完二次第つてところあるし」

「へ？ 俺次第つてなんだよ」

りせはそれには答えず、にんまり笑った。

「それよりさ、ねえ、完二。私のこと好き？」

「……いきなり何を言つてんだ、お前！？」

こいつに対して、好きとか嫌いとか考えたこともなかった。だって、幼馴染だぜ。こいつの歯欠けの頃の顔も知ってるんだ。色気なんて感じる筈がねえだろ。

「いいから、答えてよ。私のこと、好き？ それとも嫌い？」

りせの気迫に気圧されるように、俺はたじろぐ。

「な、仲間だろうが。嫌いな訳、ねーだろ」

というのが精一杯だった。

「そう、よかつたー！」

りせはにつこりほほ笑んだ。これを見ると、りせファンの男どもは騒ぐらしい。現に花村先輩は、「キョンキョンするなあ」と身体を振るわせることがある。

「じゃあ、里中先輩と何かあったら、完二は私の味方をしてくれるよね？」

「何かつて、なんだ？」

「それは、後で分かる。いい、約束よ。私のこと好きなら、絶対、ぜーったい、私の味方になってね」

りせはそれだけ言つと、もう帰らなきゃ！ と言い残して帰つていった。

俺は首をかしげた。里中先輩だけじゃなく、りせまで俺に何をしろつて言うのだ？ さっぱり訳が分からん。

「……という訳なんすよ。訳わかんねえつつつか、何なんだっつか」

俺は、後から来たくゝ先輩とクマに事情を打ち明けた。

くゝ先輩は、この自称特別捜査隊のリーダーで、俺が尊敬する人だ。寡黙だけどやる時はビシツとやる、男伎に溢れた人でもある。

以前に俺が悩んでいた時も、話をじつと聞いてくれたのはくゝ先輩だった。だから今回も話がしやすかった。

くゝ先輩は、ふむ、と腕を組んで考えていた。先輩は考え事をする時に、いくつかの言葉を持っている。大抵、3つくらいかな。その内の一つを口にするって感じた。

先輩は思慮深いから、3つの中から選ぶのに時間がかかる時もある。腕を組んで考えた後、足を組みかえたり首を傾げたりすることもある。そうなるとなかなか次の会話に進めない。が、それでも俺はくゝ先輩はすげえと思う。

「それは……2人に何か恨みでも買ったとか」

……前言撤回。今日のくゝ先輩は切れ味が鈍ってるのかも。俺のテンションが下がって、好感度にも影響する。

「そ、そりゃないっすよ。俺、何もしてないし」

この前まで、ここで2人を含めた自称特別捜査隊のメンバーで会っていたんだぜ。その時、態度に変化はなかった。それが急に恨まれるなんてありえねえ。

「いや、怪しいクマ」

クマが口を挟む。クマつつつても、目の青い外国人っぽい野郎だ。なんでクマって呼ばれているかと言うと……話が長くなるからパス。面倒なのはうぜーだろ。

「彼女達はカンジのことを気にしているクマ。カンジが何もしてないとしたら、それは……」

言いながら顔を赤らめるクマ。……なんか、色っぽいじゃねえか！ と、俺は胸がキュンとなって目を逸らす。男のくせに、とは言



うなよ。こいつのキラキラオーラを見たら、キュンとしないヤツはいねえんだ。

「それは？」

「……先輩がクマに尋ねる。」

「三角関係クマ。でも、チエチャンやりセチャンがカンジに惚れるなんて……」

今度は青くなるクマ。世にも恐ろしいと十字を切りだす。

「こらっ、そいつはどーゆー訳だ!？」

「だって、せつかく事件が解決して平和になったというのに、またひと波乱起きそうな気がするクマ」

「クマが言うのも、一理あるな」

「……先輩が言う。」

「惚れる……」

クマはりせが仲間になるまではクマがマヨナカテレビ内のナビゲーションをしていたので、察知する能力が高い。

俺は考えてもみなかった可能性に、頭をガツンと殴られた気がした。

思えば林間学校で大谷花子になーぜーか一方的に振られ、それから仲間の白鐘直斗を目の前になるとアガってしまう時期もあった。

今まで女っ気のない漢の人生を送って来た俺が、ここまで女性と接触を持つという事は……ひょっとして……。

「モテ期だな」

『新たな敵の攻撃か?』『もうすぐクリスマスだな』『それはモテ期って言うんだぞ』の中から、……先輩がぼつりつつぶやく。

「ええっ! カンジにモテ期?」

クマは分かりやすいリアクションをする。

「なんだよコラア、俺がモテ期じゃ悪いかよっ」

「……だって、あり得ないクマ。やっぱりカンジが何かしたとしか

思えないクマ」

「だーから、俺は何もしてねえってばっ!」

とまあ、話は平行線だった。

「とりあえず、そつとしておこう」

〳〵先輩はいつもの言葉で様子を見る宣言をする。

2人はこれから菜々子ちゃんのお見舞いに行くと言っているので別れた。菜々子ちゃんというのは、〳〵先輩の従姉妹だ。俺達が関わった事件に巻き込まれて危うく殺されるところだった。かわいそうに、今でも入院中だ。

別れ際、〳〵先輩たちから、一緒に行こうと誘われたが断った。そういうのをするのは柄じゃない。その代わり、手製の編みぐるみを渡す。雪だるまの形したヤツな。ベッドサイドに可愛らしいもんを置いておくと、和むだろ？

そんな訳で、1人でジユネスを出て帰り道の事だ。

商店街から天城屋旅館に続く坂道を、天城先輩が段ボール箱を抱えてよろよろと登ってゆくのを見た。

「持ちますよ、天城先輩」

見兼ねて俺が声をかけた。段ボールを持ってやる。

「あ、完二くん。ありがとう……」

天城先輩が顔を赤らめながら言う。この先輩、話そうとするとすぐ顔を赤らめる。ガキの頃から顔なじみだが、こんな風に親しく話をするのは最近の事だ。なんたって、相手は老舗旅館のお嬢様。こっちは染物屋のボウズ。接点はあるからねーからな。

「ごめんね、完二くん。荷物持ちさせちゃって」

2人で並んで坂道を登っていると、天城先輩は申し訳なさそうに言った。

「思ったより重いつスね。何が入っているんですか？」

「み、見ないで!」

天城先輩が鋭い声を出して、段ボールを奪い返そうとする。

「……分かりました。見ませんから」

あまりの剣幕に俺がそう言つと、ホツとしたのか手を離れた。

「ごめんね、荷物持ってもらつどころか、気まで使ってもらつて…

…」

また、顔を赤らめる。その様子に、こっちも気恥ずかしくなつて、互いにそつば向きながら並んで歩く。

「あのさ、完二くん」

しばらくして、天城先輩が声をかけて来た。

「なんスか？」

「お願いしたいことがあるんだけど」

「はい？」

「今度、ウチに遊びに来て欲しいの」

「いいつスよ。じゃあ、花村先輩とくく先輩に連絡とつて……」

「あ、彼らはダメ！」

「はい!？」

俺はビツクリして天城先輩の方を向いた。天城先輩は、顔を真っ赤にしてうつむいている。

「だから、完二くん一人で来て欲しいの」

「えっ!？」

頭が真っ白になる。これは、一体……。

「あ、その、変な意味じゃなくつて、普通に、気楽に、遊びに来て欲しいんだけど……ダメかしら？」

男が、普通に、気楽に、女の子の家に遊びにくつて、ないと思つんスけど……。

「ダメなら、いいのよ。ごめんね」

「あ、いや、そういうことじゃなくつて……」

「じゃあ、大丈夫なの？」

「えっ? いや、その……はい」

「良かった。完二くんに断られたらどうしようと思つてたの」

天城先輩は段ボールを持っていて俺の手を握り締め、何度も頷いている。俺が断らなかつたのがよっぽど嬉しかったみたいだ。

「あ、ここまででいいわ。荷物持ってくれてありがとう」  
従業員が出入りする勝手口の手前で、天城先輩が言った。

「あの、こんなの言うの悪いんだけど……今日のこと、他の人には内緒にしてね。ウチの旅館の人たちもそうだけど、くんとか花村くんとか、そういう人たちにも」

どえらい秘密でも抱えているみたいに、天城先輩が言ったので、俺も思わず、

「分かりました」

と、答えざるえなかつた。どえらい約束を交わしてしまったような気もするが、俺の方も勢いでうんと言ってしまった以上、今からは断りづらい。

「それじゃ、近い内に連絡するわね」

重い段ボールをよろよろと持ちながら、天城先輩はバイバイと手を振ろうとしてきたので、俺はハラハラした。案の定、そのまま勝手口に一度ぶつかってから、中に入っていった。転んだりしないか大丈夫かよ、と心配になる。

勝手口から坂道につながる小道を下りながら、俺は首をかしげた。これで3人目。これはどういうことか、とさすがの俺も気になって来る。

モテ期、とくく先輩の言葉を思い出す。まさかあ、と思いつつも、やっぱりそうかな、という気もしてくる。

小道の藪が、ガサガサと音の立てた。突然、小柄な人影が俺の行く手を阻む。

「直斗じゃねえか」

俺は声をかけた。コイツ、見た目は少年っぽいが女だそう。探偵としての腕は逸品で、なかなか鋭いところがある。が、俺は出会いが不味かったのか、正直言って苦手だ。

というのも話していると、段々、自分の感覚がおかしくなって、男に話しているのか女に話しているのか分からなくなってしまふ。で、まるで、漢が男に惚れているような変な気持ちになってきてしまふから、コイツとの会話は緊張するんだよ。

「巽くん、やっぱりここでしたか」

まるで俺がここにるのが当たり前前つつう感じで話しかけてくる直斗。

「なんだよ、お前。ここで何をしていたんだ？」

「僕が何をしていたかは、問題じゃない。フォーカスを当てるべきは、巽くん。君がなにをすべきか、だ」

なんだか難しい言い方をするが、要するに、自分のことは質問するな、つつーことかな。コイツとの会話には、いちいち考えないと答えが見えないことがある。

「1つ忠告しておくけど、天城先輩の誘いには乗らない方がいいでしょう」

「なっ！ お前、聞いていたのか？」

俺は下世話なところを見られてカツとなる。

「聞いていませんよ。ただ、多角的な推理の結果、天城先輩が君を誘うのは必定と思っただけです」

小難しいこと言うなあ……。

「ついでに、里中先輩や久慈川りせさんから、色々誘われると思いますよ、それも全部断った方がいいと思いますよ」

「お前に指図される覚えはねえ」

そこまで言われると、ちよつとムカつとくるので言い返す。男だつたら胸倉をつかんで怒るところだが、やっぱり女には手出しは出来ねえな。

「僕は、巽くんの為に言ってるんですよ」

「何のために？」

「巽くんがいい人だからです」

涼しい顔で、直斗は言った。

「は!？」

「巽くんは単純ですが、とてもいい人なので、彼女たちのせいで傷ついて欲しくないんです」

「はあ!？」

俺は、今、言われたことが頭でリピートして見る。いい人……いい人……傷ついて欲しくない……欲しくない……俺、人生それなりに生きているけど、今までそんなこと言われたことないわ。

「では、忠告はしましたよ。僕を信頼してくれるなら嬉しいんですけど」

直斗を信頼？ それって……他の3人より直斗を大事にしるってこと？

頭がこんがらがって、次の言葉が出せずにいると、直斗は、では、と帽子に手をかけて会釈をして去っていった。

後にはポケっとしたような面で突っ立っている俺だけが残った。

「4人目が現れた」

俺はあまりの状況に、つい口に出してしまった。

間違いない、……先輩の言う通りだ。これは俺のモテ期がやって来たのだ。

しかし、この状態、どうしよう!？ とりあえず、花村先輩には内緒だな、きつとショックを受けるだろうから、と思った。

<To Be Continued>

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2552z/>

---

巽完二の場合

2011年12月9日00時52分発行